

北村透谷

高長寺は小田原の新幹線口から数分の住宅街に在る。

昔、春の彼岸の頃になると市内の城山に位置する高長寺の自木蓮を妻とよく見に行った。例年この時期になると「彼岸の花」として地方紙に写真入りで紹介される。樹齢およそ三百五十年、高さ十五メートル、幹回り三メートルほどの大木で、枝もたわわに花を咲かせる。小田原市指定の天然記念物にもなっている。いつも参詣者が多勢来っていた。

高長寺は、また明治時代の人で日本近代文学の先駆者、北村透谷の菩提寺としても知られている。寺は立派な鉄筋コンクリート造りの本堂と庫裡があり、割合と広い墓地のほぼ中央に透谷の墓がある。「透谷北村門太郎墓」。その裏に「明治二十七年五月十六日死」と書かれている。同じ墓石の右側に「透谷妻美那子 昭和十七年四月十日七十八才昇天」と記されている。小さな墓石である。

この墓はもともとは東京都港区白金台端聖寺にあったが、昭和二十九年五月に挙行された東穀没後六十年祭のときにここに移された。

これとは別に透谷の記念碑は、小田原城址公園内の文部省指定史跡、馬屋曲輪跡に建っていた。「北村透谷子献す」と島崎藤村の揮毫によるものだ。この文学碑は昭和四年に市内の大久保神社内に建立されたのだが、やはり透谷没後六十年祭の時にここに移された。現在は南町の小田原文学館の敷地内に在る。石碑は表面は苔むしていて、高さ三メートル、幅五メートルほどの赤褐色の見映えのするものである。

透谷北村門太郎は明治元年に小田原に生まれた。父快蔵、母ユキの長男である。祖父は玄快といい小田原藩の藩医であった。小田原藩は薩長藩閥政府の下で冷遇された。藩医は厳密な意味での士族ではないが、士族と同様の身分であり、いわば門太郎は没落士族の子弟といっている。透谷は数え年六歳まで母に育てられ、六歳から十一歳までを祖父とまます母に育てられた。父母は透谷を祖父に預けて東京に移住したのである。やかましい祖父と無頓着な祖母

とに育てられた透谷の少年時代は、決して心地よいものではなかった。後年透谷を苦しめた「気鬱病」もこの頃に萌芽したのだろう。

私の家から歩いて十分ほどの、国道一号線に面した少し箱根寄りに「北村透谷生誕之地」という小さい碑が建っている。この石碑の揮毫者は堀越英ひさといい、透谷と美那子みさの間に生まれた一人娘である。

もともと北村家の菩提寺は小田原郊外、国府津の先の前川にある長泉寺であった。長泉寺は「R国府津駅から十七、八分東京寄りに歩いた海沿いの寺である。広い境内にはみかん畑があり、線路越しに相模の海が望まれる。透谷は、長泉寺滞在中に『一夕観』『漫罵』『万物の声と詩人』などを書いている。島崎藤村もここを訪れている。

透谷の少し年下の明治女学校の僚友だった藤村は、後年『桜の実の熟する時』と『春』で、彼の文学上の出発がいかん透谷の強烈な影響を受けたかを、つぶさに描きだしている。藤村の『春』（一九〇八年）初版の和田英作による口絵には、国府津海岸で語り合う藤村と絶望した透谷の姿が描かれている。しかし、国府津での生活も透谷の心身をよ

く養うにはいたらず、鬱状態は進んでいった。

透谷は小田原が生み出した唯一人の天才、もしくは天才的文学者である。小田原は過去に尾崎一雄や川崎長太郎、現在では夢枕獏という著名な作家を輩出している。だが、他の分野も含めて天才的と言えるのは透谷だけだ。豊臣秀吉の小田原征伐の時に生まれたあまり名誉とはいえない「小田原評定」などという言葉は、透谷のイメージからはほど遠い。二十七歳で自死した透谷の生涯は鮮烈であった。「透谷は日本近代の思想と文学とがまだまどろんでいた明治二十年代前半（一八九〇年前後）という時期に、わずかに現れた二葉亭四迷の『浮雲』、森鷗外の『舞姫』という先駆的な二作がなお伴っていた消極的な姿勢を破り捨て、初めて公然と近代文学の独自の目的・理想と確かな存在理由とを明らかにしたのである。」（小田切透雄）透谷はこれを、『厭世詩家と女性』『徳川氏時代の平民的理想』『人生に相渉わたるとは何の謂ぞ』などの鮮烈な文芸評論によって展開すると同時に、それらを通して人間の内面性と思想の領域での民主的自由の追及に道を開き、明治の思想世界でまさに最前線に立っていた。

透谷の作品で私が好きなのは評論文である。勿論、『楚囚之詩』や『蓬萊曲』などの劇詩は彼の壮大な思考実験であろう。「特に『蓬萊曲』は、日本近代の知的混乱を象徴している」(桶谷秀昭)。透谷は時代に対して早く生まれ過ぎたゆえの混乱の最もいたましい犠牲者であるが、『蓬萊曲』はいわばその混乱の痕跡と犠牲者の苦痛とを生々しく留めている作品である。

それに比して透谷の評論は心に快く、また密度の高さをもって響いてくる。ドストエフスキの『罪と罰』に対する日本で最も早い当時の文学者の水準を抜いた洞察は驚きだ。それと同時に、透谷のフエミニズムの限界も見えてくる。だが、時代に挑戦し、人間の本质に迫った透谷の文学作品はこれからも読み継がれていくに違いない。

高長寺の白木蓮の鈴なりの花は、白というより象牙色に近い。透谷の魂のように気品のある鮮やかな花が春の空に揺れている。私と妻は白木蓮を振り返りつつ、高長寺を後にするのが常だった。

色川大吉氏はその著『北村透谷』で、愛好する作品の最後に『一夕観、其一、其二、其三』を掲げている。私もこ

の『一夕観』が好きなので『其二』を最後に載せたい。

われは歩して水際に下れり。浪白ろく万古の響を伝え、
水蒼々として永遠の色を宿せり。手を拱ねきて蒼空を察す
れば、我れ「我」を遺れて、飄然として、襤褸の如き「時」
を脱するに似たり。

茫茫乎たる空際は歴史の醇の醇なるもの、ホーマーありし時、プレトリーありし時、かの北斗はいまと同じ光芒を放てり。同じく彼を燭らせり。同じく彼を発らけり。然り、人間の歴史は多くの夢想家を載せたりと雖、天涯の歴史は太初より今日に至るまで、大いなる現実として残れり。人間はこれを幽奥として畏るゝと雖、大なる現実を始めより終わりまで現実として残れり。人間は或は現実を唱え、或は夢想を称えて、これを以て調和す可からざる元素の如く諍へる間に、天地の幽奥は依然として大なる現実として残れり。

完